

## 競技スポーツ選手の内心と発言、および原因帰属と自己呈示の関連について

Real intention, actual expression, and relevance between causal attribution and self-presentation on athletes

須田 和也・高田 正義 (愛知学院大学)

三宅 信花 (日本体育大学)・西條 修光 (日本体育大学)

Kazuya SUDA, Masayoshi TAKADA, Nobuka MIYAKE, Osamitsu SAIJO

### 概要

本研究は社会心理学的観点より、競技スポーツ選手の自己呈示について検討するものであった。自己呈示の起因に原因帰属があることを想定し、原因帰属と自己呈示方略の関連性について検討した。

思わしくないプレーに対する原因帰属からみた内心と発言には不一致がみられた。

因子分析の結果得られた原因帰属得点と、セルフ・ハンディキャッピング得点および原因呈示得点との関連について検討した。原因帰属の下位尺度の能力・素質得点とセルフ・ハンディキャッピング得点の関連は認められなかったが、人的・物的環境および心身コンディションとの関連が認められた。

国際レベルの選手は、全国大会レベルおよび地区大会レベルの選手と比べて、能力・素質への原因帰属得点が低いことが明らかになった。そして、地区大会レベルの選手は、セルフ・ハンディキャッピングと原因呈示のどちらかの傾向があることが明らかとなった。

**キーワード：**競技スポーツ、原因帰属、自己呈示、セルフ・ハンディキャッピング、原因呈示

### Abstracts

This paper deals with self-presentation by the athletes on the level of competitive sports from the viewpoints of social psychology. This paper examines the relevance between causal attribution and self-presentation on the assumption that the latter is caused by the former.

Our research identified the incompatibility between real intention by causal attribution and actual expression when athletes had unsatisfactory performance.

This paper also examined the relevance between casual attribution scores and the self-handicapping (SH) scores, and between causal attribution scores and causal presentation

scores, after conducting factor analysis. The result could not identify the relevance between capability and talent, which is the sub-scale of causal attribution, and the SH scores. Instead, our research indicated that the SH scores have been rather influenced by the personal and material circumstances and psychological and physical conditions of the athletes.

This paper also demonstrated that the athletes on the international level tend to have low scores on causal attribution on their capability and talent, compared with those on the national and local levels. The higher scores the athletes on the local level get for causal attribution, the higher scores they get for causal presentation, and the lower scores they get for SH.

keywords: competitive sports, causal attribution, self-handicapping, causal presentation

## 1. はじめに

社会学者のゴッフマン（1974）はその著書『行為と演技—日常生活における自己呈示（石黒毅訳）』で、日常生活における人と人との相互行為の分析に、演劇論的アプローチを用い、社会的ルールや儀礼が行為に及ぼす影響について詳細に記述した。彼の人と人との相互作用の詳細な知見は、後の社会心理学において自尊心や勢力獲得というような個人の動機づけ過程と関連づけられながら展開されていくことになった<sup>注1)</sup>。

自己呈示：self-presentation とは、「他者との関係のなかで、自己の勢力を増大しようとする動機に基づき、自己の特性に関する他者の帰属を誘発あるいは形成するために行われる行動の側面」と定義される（Jones & Pittman, 1982）。すなわち、個人の評価が行われるような場面において、他者が利用すると予想される手がかりをうまく“調整”して特定の印象を他者に与えようとする試み（安藤, 1990）のことをいう。競技スポーツにおいても選手の対人社会的環境は、監督、コーチ、チームメイト、観衆・観客、親族など多様であり、競技スポーツ選手における自己呈示という問題設定は可能である。

自己呈示の方略は行為に時間軸を設定した場合、事前的な自己呈示としてはセルフ・ハンディキャッピング：self-handicapping（Berglas & Jhoes, 1978）（以後 SH と略）が代表的なものとしてあげられる。SH とは、Kelly（1971）の割引原理・割増原理<sup>注3)</sup>を応用したもので（伊藤, 1991）、「自分にとって重要な何らかの特性が評価の対象になる可能性があり、かつ、そこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合、遂行を妨害する不利な条件（＝ハンディキャップ）を自ら作り出したり、不利な条件の存在を他者に主張すること」（安藤, 1994）をいう。大学の水泳選手やプロゴルファー選手を対象に

Rhodewalt, Saltzman, & Witmer (1984) は、SH 傾向の強い選手は、重要な試合の前に練習量を増加させず、コンディションも好ましくないという認知をする傾向が見られることを報告している。この Rhodewalt, Saltzman, & Witmer (1984) の研究に見られる SH は、「努力の差し控え」<sup>注2)</sup> といわれるもので、競技スポーツにおいては、その他に試合前に過度な練習を自らに課して、望ましいパフォーマンスが展開できないように疲労を蓄積させること、達成できそうな高い目標を掲げること、課題遂行前に困難な条件があることを口外することなど SH の疑いがある言動は多数想定できる。

このような競技スポーツにおいて想定される SH の過程を図 1 に示した。課題遂行が困難な場合、あるいはできそうもないプレーに挑戦しなければならない場合に SH は動機づけられる。そして SH 遂行後プレーが成功した場合は、他者から賞賛を受けることが期待され、たとえ失敗に終わったとしても同情の評価が期待できる。すなわち成功・失敗の何れの場合においても選手は他者からの評価を下げることはない。その結果、選手は自尊心の維持や低下を回避することが可能となる。

一方、事後的な自己呈示としては釈明：account が代表的なもととしてあげられる (Scott & Lyman, 1968) (Harvey, Weber, & Orbuch, 1990)。釈明は本心と異なる自己の失敗についての明言で、自己の責任回避、あるいは自己の正当性を主張することであり、他者からの評価の低減を避けるために行われる。この事後的自己呈示としての釈明に関して、競技スポーツの心理学的研究は殆ど行われていないのが現状である。その理由としては、自己評価としてのプレーの成功や失敗あるいは勝敗は、試合やプレーの目標により一概に適切、不適切の評価は困難であり、そのため厳密に社会心理学における釈明の定義にあてはまる明言を抽出することは困難であるからである。しかしながら、競技スポーツの指導現場において、選手の

明言は重要な情報源であり、その心理的意味合いを研究対象とすることは、選手理解・把握という観点から十分意義あるものといえる。したがって本研究では社会心理学での釈明の定義を参考に、「競技者がプレー後

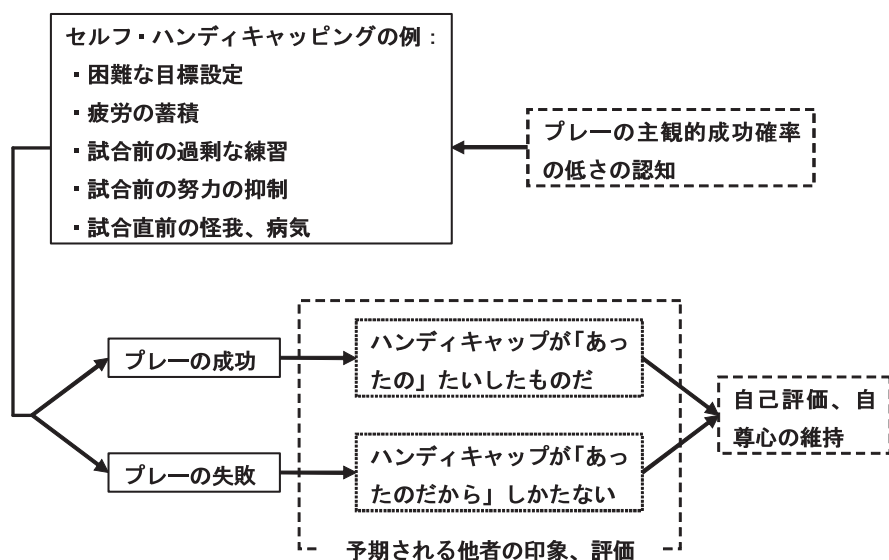


図 1. 競技スポーツにおけるセルフ・ハンディキャッピング

に、自己の思わしくないプレーについて、主にその原因についての他者に明言すること」を釈明とは呼ばず「原因呈示：causal presentation」と定義し研究を進めることにした。

ところで、行為の動機の認知的側面に着目すると、行動結果の原因をどのように捉えるかにより、後の行動に影響を及ぼすことがWeiner（1972）の原因帰属の「統制の位置×安定性」の2次元モデルの提示以後、多くの研究により明らかにされている。競技スポーツでは自己の外的要因に失敗の原因を帰属させることは、自己の統制力の及ぶ範囲以外の出来事と認知されることを意味し、後の成功への期待感は低下する。すなわち、失敗が統制不可能な外的要因に帰属される場合、積極的な課題への取り組みを妨害するために努力の差し控えや、課題回避という自己呈示が動機づけられることが予想される。しかしながら、競技スポーツ選手の原因帰属に関する研究は多数行われているが、原因帰属と自己呈示の関係性について検討した研究はないのが現状である。

競技スポーツ選手の自己呈示は、時には対人関係の維持・安定とはまったく異なる次元で、自尊心維持や精神的安定を図るために行われる。この意味において競技スポーツ選手の自己呈示は、ストレスフルな競技生活を送る上で自己防衛という重要な意味・心理的機能をもっている。しかし、選手育成、選手個人の心理的成長という観点からみれば、自己呈示は「本来の自己に立ち向かわない」、「本当の自己理解からの逃避」を促進する言動でもあることも異論の余地はない。

このような選手にとって多様な対人的、心理的機能を持つ自己呈示と、その動機的側面を担うプレーの結果の原因帰属との関係性について明らかにされることは、選手の対人・社会的関係分析の着眼点を提供し、さらにはスポーツメンタルトレーニング指導での、「選手自らの気づき」を深める一助となるものといえる。

以上、社会心理学での研究成果と競技スポーツの現場で想定できる対人社会的構造を踏まえ、本研究では、まず競技スポーツ選手が遭遇する、思わしくないプレーの原因帰属と原因呈示から、内心と発言の不一致について検討する。次に、原因帰属と自己呈示の得点化を行い、原因帰属を自己呈示の起因として位置づけて、原因帰属と自己呈示の関係について検討する。そして、競技レベルの相違による自己呈示方略について探索的に探ることを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1. 調査用紙

#### 2.1.1. 原因帰属、原因呈示項目の選定・作成

競技スポーツと学業はともに達成行動であるため共通する点が多い。樋口ら（1980）は学業場面における原因帰属の主要な要因として自己の行為や努力、自己の安定的属性や

能力、自己の変動する状態や調子、自己と課題との関係、自己と相手との関係、課題の困難度や指導、運や偶然をあげている。この7つの要因を大カテゴリーとして、伊藤(1985)、伊藤(1987)、山本(1991)、筒井(1992)、出村(1994)、伊藤(1996)の原因の帰属因をそこに振り分け、さらに同義と考えられる項目を整理・統合し最終的に16項目を設定した。例えば「自分の能力が低いこと」、「自分の努力が足りないこと」、「チームの組織や体制が悪いこと」などであった。これらの16の帰属因に対して原因帰属については自己の「思わしくないプレー」<sup>注4)</sup>を想起させ、その「原因の適合度」を「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法の反応カテゴリーを設定し回答を求めた。

原因呈示については原因帰属の帰属因と同じ16項目について「思わしくないプレーの原因を人に話す頻度」について「1. ほとんどない」～「5. しばしばある」の5件法で反応カテゴリーを設定し回答を求めた。

### 2.1.2. SH 項目の選定・作成

池田(1990)が指摘する、利己的な帰属の前提として、評価的状况とパフォーマンスの前に主張されることを項目作成の基準とし、沼崎・小口(1990)および池田(1993)のSH尺度を参考に、競技スポーツの練習場面で想定される10項目を作成した。項目の例としては「練習のときでも、練習以外のことが気になる」、「できなくても、難しいプレーを好んで練習する」、「日常生活で不摂生をする」などであった。なお、反転項目として「なぜこの練習をするのか、理解しようとする」を設定した。反応カテゴリーは項目の「経験する頻度」について「1. ほとんどない」～「5. しばしばある」の5件法を設定して回答を求めた。

## 2.2. 調査対象と調査期間

N 体育大学の学生122名と社会人競技者4名の合計126名を対象に、2006年1月から5月にかけて、自由速度法にて回答を求めた。得られた回答に未記入のものがあるものを除外して、最終的に95名(男52名、女43名、平均年齢21.2歳、標準偏差1.66歳)のデータを以下の分析の対象とした。有効回答率は75.4%であった。

## 2.3. 統計処理

統計処理はパソコン統計プログラム SPSS (Ver.14.0) を使用した。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 思わしくないプレーの原因帰属と原因呈示

表1は原因帰属と原因呈示それぞれの項目について、回答の平均値の高い順に並び替

えたものである。原因帰属の順位と原因提示の順位を結ぶ実線は回答の平均値において原因帰属<原因提示であったことを、点線は原因帰属>原因提示であったことを示している。この原因帰属と原因提示の順位の結果について、順位の差（原因帰属順位－原因提示順位）についてみると以下のような結果となった。なお、（ ）は原因帰属の順位から、原因提示の順位を引いた差を示している。

順位の差が正の項目を上位5位まで列挙すると、「リーダーの指示・指導が不適切であること（8）」、「チームの組織や体制が悪いこと（5）」、「練習課題・練習方法が不適切なこと（4）」、「自分の体調や調子が悪いこと（3）」、「自分の休養が少ないこと（2）」という結果であった。一方、順位の差が負であった項目を上位5位まで列挙すると、「自分の努力が足りないこと（－10）」、「自分の実力や競技力が低いこと（－4）」、「自分の素質や才能がないこと（－3）」、「自分の気分が乗らないこと（－3）」、「練習相手の能力が自分とあわないこと（－2）」、「自分の運や偶然さが手伝ったこと（－2）」という結果であった。

表1. 原因帰属項目と原因提示項目の平均値の順位の比較

原因帰属の順位	$\bar{X}$	原因提示の順位	$\bar{X}$
1	3.79	1	3.11
1	3.79	2	3.05
3	3.74	3	3.00
4	3.65	4	2.96
5	3.63	5	2.87
6	3.53	6	2.85
7	3.36	7	2.83
8	3.33	8	2.79
9	3.23	9	2.69
10	3.12	10	2.63
11	3.07	11	2.57
12	2.96	12	2.55
13	2.71	13	2.42
14	2.62	14	2.34
15	2.60	15	2.20
16	2.45	16	2.09

※ 実線は原因帰属順位<原因提示順位の項目を、点線は原因帰属順位>原因提示順位を示す

自分では思わしくないプレーの原因であると認知していなくても、他者に話をする機会が多い項目にはリーダーや組織、練習内容などの統制の位置から見た場合、自己の外部に帰属する原因が多いことが、一方、自分では思わしくないプレーの原因と認知していても、他者に話す機会が少ない項目は、自己の内部に帰属する原因が多いことが明らかとなった。

以上の結果は、自己に関わる原因については、他者に話すことなく、一方自己以外のことについては原因として語られることがあることを示している。すなわち、思わしくない

プレーの原因が自己にあっても、他者へ話すときには外的要因に「帰属因の置き換え」が行われているという意味において、内心と発言の不一致があることを推察させる。外的要因に原因が帰属されれば、一時的には自尊感情は維持できるが、自己に関わることが原因であると他者から認知されると、逆に自尊感情を低下させることにつながるためと考えられる。

### 3.2. 因子分析による原因帰属および自己呈示の得点化

#### 3.2.1. 原因帰属の得点化

因子分析に先立ち、回答の分布について検討した。回答の分布に著しい偏りが見られた「自分の努力が足りないこと」、「練習課題・練習方法が不適切なこと」、「自分の競技経験が少ないこと」の項目は除外して、残りの13項目を因子分析の対象とした。

表2に因子分析の結果を示した。因子の抽出は主因子法を、軸の回転は因子間の相関がある程度予想されるためプロマックス法を用いた。その結果、固有値1.00以上の因子は3つ抽出され、これら3因子の累積分散寄与率は55.96%であった。

以下に因子の命名を試み、内的整合性の指標として〔 〕にCronbachの $\alpha$ 係数を記載する。

第1因子は実力、能力、素質の自己認知に関わる項目が高い負荷量を示したので「能力・素質」と命名した〔 $\alpha = 0.84$ 〕。

第2因子は全般的にはチームや組織、練習課題などに関する人的・社会的な項目に高い負荷量を示していた。「自分の気分が乗らないこと」が第2因子に高い因子負荷量を示しているが、数値が項目採用の一般的基準としての0.40に達して

いないこと、また内的要因を示す項目と考えられるため、尺度化において対象とはせず、この項目を除外して「人的・物的環境」と命名した〔 $\alpha = 0.75$ 〕。

第3因子は疲労、休養、体調に関わる項目が高い因子負荷量を示していたので「心身

表2. 思わしくないプレーの原因の帰属項目の因子分析の結果

項 目	第1因子	第2因子	第3因子
5. 自分の実力や競技力が低いこと	0.82	0.15	0.24
3. 自分の素質や才能がないこと	0.82	0.25	0.29
1. 自分の能力が低いこと	0.77	0.17	0.07
16. チームの組織や体制が悪いこと	0.25	0.74	0.59
4. リーダーの指示・指導が不適切であること	0.27	0.69	0.47
14. 施設や設備などの練習環境が悪いこと	0.08	0.58	0.46
8. チームメイトの協力がいないこと	0.04	0.53	0.21
10. 練習相手の能力が自分とあわないこと	0.03	0.52	0.31
2. 自分の運や偶然さが手伝ったこと	0.26	0.44	0.09
9. 自分の気分が乗らないこと	0.17	0.38	0.36
13. 自分の疲労がたまっていること	0.17	0.29	0.78
11. 自分の休養が少ないこと	0.29	0.49	0.66
6. 自分の体調や調子が悪いこと	0.06	0.33	0.46
抽出項目数	3	7	3
固有値	3.91	2.09	1.26
分散寄与率 (%)	30.07	16.08	9.81
累積分散寄与率 (%)	30.07	46.15	55.96

コンディション」と命名した [ $\alpha = 0.64$ ]。

若干第3因子の内的整合性は低いが、含まれる3つの項目は競技スポーツにおいて重要な因子と考えられるため、第3因子も尺度として採用した。

以上の結果を踏まえ、それぞれの因子に高い負荷量を示す項目の合計得点を算出して、3つの下位尺度をもつ原因帰属得点を算出することとした。

### 3.2.2. 原因呈示の得点化

原因呈示の得点化には、原因呈示をみるために設定した「他者に話す頻度」の因子分析は行わず、原因帰属項目の因子分析の結果得られた、3尺度に含まれる項目に対応する「他者へ話す頻度」をもって得点化することとした。これは原因呈示の回答の偏りが原因帰属の場合と異なっていること、また、因子分析を行っても原因帰属と同様の因子が抽出されるとは限らないと推測したためである。さらに後の原因帰属と原因呈示の関係性を検討するにあたり、同じ帰属因であることが対応関係を見やすく出来るためでもある。内的整合性を検討したところ「能力・素質」 [ $\alpha = 0.89$ ]、「人的・物的環境」 [ $\alpha = 0.75$ ]、「心身コンディション」 [ $\alpha = 0.77$ ] であり、ほぼ満足いくものであった。以上を踏まえ原因帰属の3因子に高い負荷量をもつ項目の合計点をもって原因呈示得点とすることとした。

### 3.2.3. SHの得点化

因子分析に先立ち、原因帰属の得点化と同様に回答の分布を検討した。その結果「用具の不備により、良いプレーができない」の項目は回答の分布に著しい偏りがみられたため除外して、残りの9項目を因子分析の対象とした。

表3に因子分析の結果を示した。因子の抽出は主因子法を、軸の回転は因子間の相関がある程度予想されるためプロマックス法を用いた。その結果、固有値1.00以上の因子は3つ抽出され、これら3因子の累積分散寄与率は55.20%であった。

第1因子には6項目が高い因子負荷量を示した [ $\alpha = 0.64$ ]。第2因子には1項目、第2因子には2項目しか高い負荷量を示す項目はみられなかった。第2因子、第3因子は尺度として用い

表3. セルフ・ハンディキャッピング項目の因子分析の結果

項 目	第1因子	第2因子	第3因子
6. やらなければならない練習を、先のばしにする	0.71	0.05	0.29
8. 自分がやりたい練習を、好んでする	0.69	0.24	-0.20
5. 練習で、手をぬくことがある	0.65	0.15	0.45
9. うまくできそうにないときは、練習内容を変更する	0.52	-0.42	-0.26
1. 練習のときでも、練習以外のことが気になる	0.50	-0.14	0.32
3. 日常生活で、不摂生（ふせっせい）をする	0.42	-0.35	-0.20
4. 困難な条件で、練習をするのが好きだ	0.01	0.78	-0.33
7. なぜこの練習をするのか、理解しようとする(逆転)	-0.12	0.45	0.62
2. できなくても、難しいプレーを好んで練習する	0.47	0.40	-0.47
抽出項目数	6	1	2
固有値	2.34	1.37	1.26
分散寄与率 (%)	26.00	15.26	14.00
累積分散寄与率 (%)	26.00	41.22	55.20



るには項目数が少ないため、第1因子のみ採用することとした。すなわち、第1因子に高い負荷量をもつ6項目の合計点を、SH得点とした。

### 3.3. 原因帰属と自己呈示の関連性

表4に原因帰属得点と自己呈示得点のPearsonの相関係数を示した。

SHは能力・素質とは関連が認められなかったが、人的・物的環境および心身コン

ディションとは関連があることが明らかとなった。Weiner, (1972)は認知される帰属因に、安定性（原因を時系列的に見た場合に安定性・変動性があるのかないのかという）次元と、統制の位置（原因が物理的な意味において行為者の内部にあるのか外部にあるのかという）次元の2つの原因次元を見出した。この2つの理論的視座を持って本研究の因子分析の結果抽出された帰属因の分類を試みると、能力・素質は「安定-内的」要因、人的・物的環境は「不安定-外的」要因に、そして心身コンディションは「不安定-内的」要因に分類される。さらにSHと相関が強かった順に並べ替えると、人的・物的環境「不安定-外的」( $r = 0.44$ )、心身コンディション「不安定-内的」( $r = 0.29$ )、そして能力・素質「安定-内的」( $r = -0.02$ )であった。この結果から、思わしくないプレーの原因に不安定要素と外的要素が強く認知されると、SHが遂行されることが推察される。

次に、原因帰属得点と原因呈示得点の関連についてであるが、3つの帰属因とそれぞれに対応する原因呈示得点は、どれも両者間に関連が認められた。ある原因への帰属は、その原因を他者に話す機会も多くあることを示している。原因の帰属内容そのものが他者へ伝達される傾向が認められた。

原因帰属得点とSH得点の関連、原因帰属得点と原因呈示得点の関連を合わせると以下のことが考察される。思わしくないプレーについて何らかの原因の帰属が生じた場合、何らかの方略、本研究においてはSHと原因呈示が、あるいは原因呈示のみという方略で自己呈示が出現するといえる。すなわち、原因帰属と自己呈示は密接な関係にあるということがいえる。しかし、どのような自己呈示を行うのかという方略的観点からみると、原因の不安定要因への帰属はSHと原因呈示の両方を生じさせ、安定要因への帰属は原因呈示を行わせるが、SHとは無関係であるということがいえる。原因の帰属因が何であるか、

表4. 原因帰属得点と自己呈示得点の相関係数 (r)

		自己呈示			
		SH	原因呈示		
			能力・素質	人的・物的環境	心身コンディション
原因帰属	能力・素質	-0.02	0.37 (**)	0.03	0.05
	人的・物的環境	0.44 (**)	0.10	0.45 (**)	0.17
	心身コンディション	0.29 (**)	0.09	0.28 (**)	0.42 (**)

\*\* :  $p < 0.01$

できなかった理由の認知・捉え方（どうしてできなかったのか）によって、どのような自己呈示方略（どのような振る舞いをするか）が出現するかは異なることを示す結果といえる。

さらに選手が感じるストレスや自己成長という観点からは以下のように考察される。失敗場面に先行するSHの機能は、思わしくないプレーの原因を割り引き、自尊感情の維持やそれに伴う自己概念の維持に貢献するものといえる。SHは何らかの自尊感情の低下に伴うストレスが予期される場合、事前的な自己防衛の布石という働きがある。したがって、思うようなプレーができないことが予期される場面においては、不安定な人的・物的環境や心身コンディションがストレスになっていることが予想される。この場合のSHは選手が感じるストレスのストレス対処法として機能しており、適切な精神衛生レベルを維持する重要な働きをしているといえる。

一方、自己成長という観点からは、選手として必要な心身コンディションの調整力のなさ、あるいはコンディショニング準備不足を割り引くためにSHを遂行しているとも解釈できる。また、人的・物的環境への不満が、事前的な自己呈示としてのSHとして表出しているとも解釈できる。この場合のSHは選手が自己の心身コンディショニングスキルを見つめる機会、あるいは、人的・物的環境改善のためのコミュニケーションスキルの自己認知の機会を奪うものとして機能していることが予想される。

SHは競技スポーツにおけるストレス対処と自己認知の回避の何れの機能をも持ち合わせていることが考察されたが、どのような条件の場合、どのような媒介変数が介在した場合に、それぞれの機能が発動するかは今後の研究課題としたい。

### 3.4. 競技レベルの相違による原因帰属と自己呈示の関連性

#### 3.4.1. 競技レベル別にみた原因の帰属因の相異

はじめに、自己呈示の起因となりうる原因帰属のあり方が、競技レベルで異なるかどうか検討した。表5は競技レベル別に見た、原因帰属得点の平均値と標準偏差である。この結果について、1要因3水準（地区大会、全国大会、国際大会）の分散分析を行った。能力・素質得点については（ $F(2, 89) = 5.44, p < .01$ ）、人的・物的環境得点については（ $F(2, 89) = 1.28, p > .05$ ）、心身コンディションについては（ $F$

準（地区大会、全国大会、国際大会）の分散分析を行った。能力・素質得点については（ $F(2, 89) = 5.44, p < .01$ ）、人的・物的環境得点については（ $F(2, 89) = 1.28, p > .05$ ）、心身コンディションについては（ $F$

表5. 競技レベルの相違による、原因帰属得点の平均値と標準偏差

	競技レベル	N	$\bar{X}$	SD
能力・素質への原因帰属	地区大会	37	11.27	2.48
	全国大会	41	10.93	2.63
	国際大会	14	8.71	2.30
人的・物的環境への原因帰属	地区大会	37	17.73	5.29
	全国大会	41	16.80	4.88
	国際大会	14	15.29	3.91
心身コンディションへの原因帰属	地区大会	37	11.08	2.56
	全国大会	41	10.88	2.46
	国際大会	14	9.29	2.64

(2, 89) = 2.71, .05 < p < .10)であった。人的・物的環境、および心身コンディションについては、競技レベルの主効果は見られず、競技レベルの差はないことが明らかとなった。能力・素質については主効果が有意であったため Scheffe の多重比較を行った。その結果を図2に示した。この結果より、国際大会レベルの選手は地区大会および全国大会レベルの選手より、能力・素質への原因帰属を行わないことが明らかとなった。

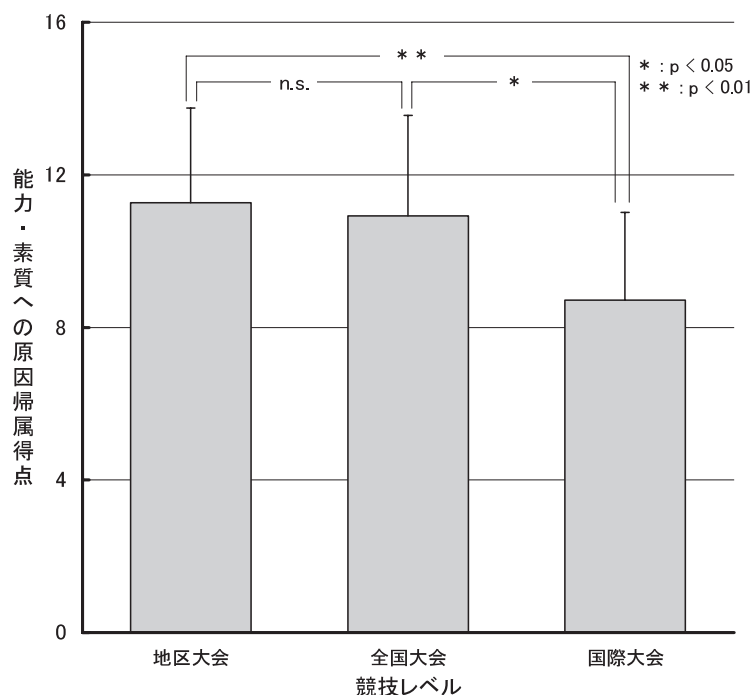


図2. 競技レベル別にみた、能力・素質への原因帰属得点の多重比較の結果

### 3.4.2. 競技レベル別にみた能力・素質への原因帰属と自己呈示の関連性

能力・素質への原因帰属が競技レベルを特徴づけていることが明らかとなったので、次に競技レベル別に能力・素質と自己呈示との関連について検討した。表6は競技レベル別に能力・素質への原因帰属とSH、および能力・素質への原因帰属と原因呈示との Pearson の相関係数をまとめたものである。

地区大会レベルの選手は能力・素質とSHは負の相関を示し、原因呈示とは正の相関を示した。このことは、地区大会レベルの選手で、能力・素質への原因帰属の傾向が高い選手は、SHの傾向が少なくなり、原因呈示の傾向が強くなることを示している。また、地区大会レベルの選手で能力・素質へ原因の帰属傾向が低い選手は、SHの傾向が強くなり、原因呈示の傾向が少なくなることを示している。すなわち、地区大会レベルの選手は能力・素質への原因帰属の程度により自己呈示方略において「SHか、原因呈示か」という二者択一的傾向があることが明らかとなった。

また、地区大会レベルの選手は国際レベルの選手に比べて、能力・素質への原因帰属得点が有意に高いことを考

表6. 競技レベル別にみた、能力素質への原因帰属得点と自己呈示得点との相関係数 (r)

		自己呈示	
		SH得点	原因呈示得点
能力・素質への原因帰属得点	地区大会	-0.37 (*)	0.48 (**)
	全国大会	0.22	0.25
	国際大会	-0.14	0.06

\* : p < 0.05, \*\* : p < 0.01

慮すると、頻繁に能力・素質への原因帰属が行われ、それとともに紋切型に、ひとつの手段において自己呈示を繰り返すことが推察される。一方、全国大会および国際レベルの選手は、能力・素質へ帰属が有意に低いことから、能力・素質への原因帰属に伴う、自己呈示を行う頻度は少なく、たとえ行った場合でも、競技レベルの低い選手のような紋切型ではなく、SHと原因呈示という2つの自己呈示方略を、臨機応変に使い分けているのではないかと推察される。その背後には、能力・素質への原因帰属の程度とともに、競技レベルに応じたストレス要因があり、それが自己呈示のあり方に影響を与えているものと思われる。

### 注

- 注1) 椎野 (2000) は「ゴフマンの社会学を理解するためには、社会構造用語や個人心理学用語によって解釈すべきでない」と述べているように、ゴフマンの関心事は主に対面的相互行為における規則や規範の記述であり、個人の内面の動機づけ的側面についてはほとんど触れていないが、彼が残した実績は個人と他者の関係性を扱う後の社会心理学に大きな影響を与えた。
- 注2) Arkin & Baumgardner (1985) は SH を行動の形態 (遂行的-主張的) 次元とハンディキャップの位置 (内的-外的) の二次元でとらえ SH を分類している (伊藤, 1991)。「努力の差し控え」は遂行的-内的次元に位置するものである。
- 注3) 「セルフ・ハンディキャッピング方略は、Kelly (1971) の割引原理・割増原理を応用したものであり、パフォーマンスに失敗したときハンディキャップが存在すれば、失敗の原因はハンディキャップに帰属され、自己への帰属は割り引かれる。一方割増原理によれば、ハンディキャップが存在するにも関わらず成功すれば、成功はハンディキャップがない場合よりも割増して自己に帰属される。これらの原理を積極的に利用するという点で、セルフ・ハンディキャッピング方略は割引原理・割増原理のより洗練された使い方といえる。」(池田, 1991)
- 注4) 原因帰属研究において一般的には成功場面と失敗場面の検討が行われることが多い。しかし、本研究の場合、自己呈示との因果関係を検討するという目的より成功場面は設定していない。そして、競技スポーツ広範に失敗場面を網羅するために「思わしくないプレー」を想定させ、その場面での帰属傾向を扱うこととした。

### 参考文献

- 安藤清志 (1990) 「自己の姿の表出」の段階. 中村陽吉 (編) 『「自己過程」の社会心理学』, 東京大学出版会, 143-198.
- 安藤清志 (1994) セルフ・ハンディキャッピング-自滅的行為の不思議, 安藤清志著『セレクション社会心理学1 見せる自己/見せない自己 自己呈示の社会心理』, サイエンス社, 54-94.
- Berglas, S. & Jhoes, E. E. (1978) Drugs choice as a self-handicapping strategy in response to noncontingent success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 405-417.
- 出村慎一・郷司文男 (1994) ソフトテニスの勝敗に対する原因帰属の性, ポジション, 競技年数及び競技力の差異について. *体育学研究*, 第38巻, 469-485.
- ゴッフマン, E. 著, 石黒毅訳 (1974) 『行為と演技 日常生活における自己呈示』, 誠信書房.
- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 (1980) 原因帰属様式 (Attributional Styles) に関する研究 -1- 原因帰属の年齢的变化に関する自由記述法による検討. *東京工業大学人文論叢*, 41-54.

- Harvey, J. H., Weber, A. L. & Orbuch, T. (1990) *Interpersonal account: social psychological perspective*. Basil Blackwell.
- 池田善英 (1990) セルフ・ハンディキャッピングに関わる研究の動向. 立教大学心理学科研究年報, 第 33 巻, 33-41.
- 池田善英 (1993) セルフ・ハンディキャッピング尺度の検討. 立教大学心理学科研究年報, 53-59.
- 伊藤忠弘 (1991) セルフ・ハンディキャッピングの研究動向. 東京大学教育学部紀要, 第 31 巻, 153-162.
- 伊藤豊彦 (1985) スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質. 体育学研究, 第 30 巻, 153-160.
- 伊藤豊彦 (1987) 問題選手に対する原因帰属. 体育学研究, 第 43 巻第 2 号, 159-166.
- 伊藤豊彦 (1996) スポーツの目標志向性に関する予備的検討. 体育学研究, 第 41 巻, 261-272.
- Jones, E. E. & Pittman, T. S. (1982) Toward a general theory of strategic self-presentation. In Suls, J. (Ed.), *Psychological perspectives on the self*, Vol, 1. Erlbaum, 231-262.
- Kelly, H. H. (1971) *Attribution in social interaction*. Morrison, NJ. General Learning Press.
- 沼崎誠・小口孝司 (1990) 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの 2 次元. 社会心理学研究, 第 5 巻第 1 号, 42-49.
- Rhodewalt, F., Saltzman, A. T. & Wittmer, J. (1984) Self-handicapping among competitive athlete: The role of practice in self-esteem protection. *Basic and Applied Psychology*, 5, 197-310.
- Scott, M. B. & Lyman, S. B. (1968) Account. *American Sociological Review*, 33, 46-62.
- 椎野信雄 (2000) ドラマトウルギから相互行為秩序へ, 安川一編『ゴフマン世界の再構築 共在の技法と秩序』. 世界思想社, 33-61.
- 筒井清次郎 (1992) 競技意欲・競技不安と原因帰属の関係. スポーツ心理学研究, 第 19 巻, 26-32.
- Weiner, B. (1972) Achievement motivation and attribution theory In Weiner, B. (Ed.), *Theory of motivation from mechanism to cognition*, Rand McNally, 354-418.